



BIOCRACY宣言2.0

東京を拠点にアーティスト活動をしています、平井有太と申します。家族は東京が地元で、自分がたぶん5代目、アメリカには通算7年住み、原発事故後の福島市には2015年秋まで約3年暮らしました。

私は、日々の生活を”前衛”と位置づけています。そこに、人間が生まれた時から有している創造性が凝縮しているからです。キャンバスは社会であり、そこに根源的な変化をもたらすことを作品としています。絵を描く画材にあたるものは「人の想い」であり、それを集めるためのインタビューを「socialscape」と名付けて、続けています。socialscapeとはランドスケープ、サウンドスケープと並ぶ概念で、「人々が語る言葉から社会の本当のかたちを削り出す」行為を指します。

私は、COVID-19による死者が4/16（金）現在で約200名と、世界の総計約15万人に対して不自然なほど少ない日本から、今後2、3ヶ月が世界と未来について決定的に重要だと考え、この文章を書いています。普段は人の言葉を聞き集めることから作品づくりを始めますが、今回は自分から言葉を発信し、この国の社会に具体的な変化をもたらすことを目的に書いています。

今、「BIOCRACY（ビオクラシー）」が必要です。

ビオクラシーとは私が福島市に住み、それこそ3.11以降の福島で暮らす人々の生活の中から見出した、デモクラシーに代わる社会システムです。デモクラシーは日本では結局、ほとんどの場合、多数決として機能しています。そして多くの場合、悲しいかな、命よりも経済が重視される傾向が強くなります。例えば今回のケースでは市民の生命よりも東京オリンピックが優先され、習近平国家主席の来日が重んじられたことで情報公開と対策が遅れ、感染が広がりました。

デモクラシーを生み出した欧米でも、究極的にはそれを「人間が勝手に決めた人間を中心に据えたシステム」として振りかざし、自然環境を蹂躪してきた結果、巡り巡って今回のようなウイルス出現という事態を招きました。人間は自らが作りあげた社会のいびつさに、自分で対応することができていないのです。

ビオクラシーは、私たちが地球上に、植物や微生物までを含む他のあらゆる生物と住まわせていただいている生命体として、より謙虚に生きることを促します。つまりそれは、すべての判断基準を「（人間だけに限らない）生命にとってどうなのか」ということに置く社会システムです。

人間社会を根底から揺るがす出来事には、カナダのジャーナリスト、ナオミ・クラインの言う「ショック・ドクトリン」がつかまといいます。大きな変革のきっかけとして、その舵取りを生活者である市民が手にできればよいものの、多くの場合そうはなりません。その機会を即座に利用するのは、たいていが時の為政者です。

現にハンガリーでは、オルバーン・ヴィクトル首相が無期限の独裁的権力を握りました。日本でもこのコロナウイルス禍の最中に、年金支給の開始年齢と、検察官の定年時期が引き伸ばされました。共に為政者に有利な取り決めであり、特に後者は、現政権が近年手を染めてきた公文書の改ざんなど、市民社会における大罪をリセットする上での決定打と言えるでしょう。しかし多くの市民は、その事実すら知らないのです。

コロナ騒動と3.11後の原発事故に対する日本政府の対応には、明白な共通点があります。それは、「測らない」ということです。

感染拡大を食い止める上で、「検査と隔離」は大前提でした。しかし、そのために必須なPCR検査を頑なにしない政府の態度を、私たちはどう理解すればよいのでしょうか。症状の出ない感染者が自宅で家族にウイルスを移し、結果として高齢者や免疫力の低い”弱者”がその被害を受けらるうことは容易に想像ができます。放射能についても同様に、「測らない」ことの被害を受けるのは子どもや、免疫力の低い存在でした。

私たちはいつ、本来であれば最も寄り添うべき社会的弱者をあえて切り捨てる社会の在り方と、決別できるのか。

例えば、私が福島で聞いた言葉を作品に昇華させた、次の2つの言葉があります。

「自由はあるんだけど、それを認識していない」

「一人で騒いでもどうにもならない」

最初の言葉には、実は「誰の手元にも、目の前に広がる歪みだらけの現実には抗う武器があること」、そして「戦いのハードルは実はとても低いこと」を伝えようとするも伝わらない、もどかしさがにじみ出ています。

2番目は、ある意味で皮肉交じりの言葉で、そこにやる気はあるんだけど、一人で熱く語ったところで弾圧もされるし、むしろ市民同士の関係性の中で冷めた目で見られてしまう、それでも「仲間がいるならいつでもいくよ」という、静かに熱い姿勢が見え隠れします。

有事の際、連帯の必要性はいつも語られます。

しかしそれは、思考停止で全体主義的な右へ倣えの連帯ではなく、それぞれが自立した、能動的な意志と判断を経た上での、有機的な連帯である必要性があります。そのような、一見相反する価値観の共存とも言える「自立と共生」を手にしようとする時浮かび上がるのが、「利他的であること」の重要性です。

利他的であることは、究極的には真に合理的な利己主義に通じます。自らの幸せ、平穏を手にしたと望むなら、その時こそ他に手を差しのべる、つまり利他的であることが結局のところ、自らを満たす上で最も有効な手段なのです。

そして、そこに向かうあらゆる判断の根底に、ビオクラシーを置く。それによって、私たちが生きるこの素晴らしい社会が、自然の逆襲によって断絶させられるものではなく、一つの持続可能な行為として、また最高峰のアート作品として、継続できるのです。

私には、3.11後の福島に身を置き、著名人でも哲學家でもない、市井の人々の言葉を集めながら確信したことがありました。それはこの新型コロナウイルスが世界を震撼させる中、さらに強固なものになりつつあります。

日本には、世界各国が歴史の中で尊い価値観を勝ち取ってきたように、その成り立ちからあらゆる自然災害にさらされ、常に自然に対して畏敬の念を持ちながら、尊い価値観を育ててきた経験があります。それはこれまで、時代の趨勢の中で資本主義や民主主義といった、人類の発展に直接的に寄与するシステムの影に隠れてしまうことの方が多くありました。

しかし今、行き過ぎた経済成長至上主義が自然環境を脅かし、私たち人類はもちろん、地球の存続さえも危ぶまれる状況が現実になっています。今こそ、何よりもビオクラシーが機能する時がきたのです。

私はここで今一度、「ビオクラシー」を宣言します。

生命に根ざす社会を、つくるべく。

4/18/2020

平井有太



平井有太プロフィール



みんな電力株式会社が運営する、“エネルギーをセレクト”できてコネクトするポータルサイト「ENECT（エネクト）」編集長／認定NPO法人ふくしま30年プロジェクト理事／アーティスト。

1975年東京生、School of Visual Arts卒。1996～2001年NY在住、2012～15年福島市在住。2013年度第33回日本協同組合学会実践賞受賞。

福島では福島大学の客員研究員として農の復興事業をJA新ふくしま（当時）、福島県生活協同組合連合会と協業し、福島市内すべての農地の含有放射性物質を測定。同取り組みを経て、根幹にあるエネルギー問題と、社会のサステナビリティ（持続可能性）との関

わりを深化させる。

単著『福島』、『ビオクラシー』（共にSEEDS出版／2015、2016）、『虚人と巨人』（辰巳出版、2016）。共著『農の再生と食の安全』（新日本出版社、2013）。

個展「From Here to Fame」（HEIGHT原宿、2005）、「ビオクラシー」（高円寺Garter、2016）。グループ展「原子の現場」（鞆の津ミュージアム、2017）、「If Only Radiation Had Color: The Era of Fukushima」（X & BEYOND コペンハーゲン、2017）、「ビオクラシー」（はじまりの美術館、2018）、「清山飯坂温泉芸術祭 SIAF2018」（旅館清山、2018）